

warehouseで競売にかけられ(東部では乾燥倉庫で1~2年熟成され)、主としてピードモント地域にあるタバコ生産工場に運ばれる。

タバコの苗床その他の耕作風景、畑・沿道・農家周辺に点・列・群をなす新旧各型のbarn(乾燥小屋)、町にある広大な平屋のwarehouse、タバコ害虫駆除の広告板等は当地特有の景観を作り上げている。

(1976.7.3)

中央アジア見学旅行

浅海重夫

昨昭和51年夏に開かれたモスクワの第23回国際地理学会議のあと、ポストツアーの1つに組まれた中央アジア地方の見学旅行に参加した。中央アジアの4つのソ連邦内共和国のうち、主としてウズベク内の主要な都市を航空機であちこち飛びあるき、各都市の周辺をバスで廻るといって約10日間のかかりいそがしい旅であった。ウズベクの首都でソ連第4の大都会であるタシケントを根拠とし、フェルガナ・コカンド・サマルカンド・ブカラなど、かつてのシルクロードの中継地に残る回教文化の遺跡と、乾燥地を緑野に変えた農業開発の現状を見るのを目的とし、コルホーズの見学などをとおして現地住民の様子にもふれたいという望みもあった。

タシケントは1960年の大地震のあと、高層ビルの建設や市街地の拡張などの著しい復興ぶりを見せ、ソ連の各地方からの流入による人口増で170万人の大都市になっている。

フェルガナはシルダリア川とその支流が環流するフェルガナ盆地の中心地で、ここからコカンドにいたる間の綿花畑や用水路を見、コカンドのレストランではぶどう、すいか、メロンなど豊富な果物を賞味して、40℃をこえる午後の暑さに耐えた。街路には溝に水を流し、街路樹の緑をたやさないが、綿や小麦の畑は礫質土壌で、日本の耕作地と比較すればいかにも低収量型の土壌であり、管理不十分の農業としかうつらない。

サマルカンドはティムール王朝以来のモスクが保存され、これを観光資源として客を誘致する一方、紡績や機械製品の工業都市にも発展しつつある。ここから東方にタジク共和国内に入った所に古都ベンジケントがあり、アラル砂漠からの飛砂で埋没した古い住居跡のある台地面と接して、カラダリア川沿岸に今のベンジケントの町が開かれているのを見た。ツアーコースの最西端にあたるブカラには、最古のイスラエルサマニモスクがあり、その周辺の公園の樹間に設けられたチャイハナ(茶屋)で、ドピン1杯10カペイカの番茶に似たお茶を飲んだ。このあたりの木の根方に、水の干上ったあとのギブスの白い沈着が目につく。

ブカラ西方の耕地は文字通り砂漠の中の開墾地で、その風上側の砂地に、飛砂をとめるための耐干性の草を生やしておかなければならない。耕地の土壌には塩類土(ソロンチャク)がふくまれており、その改良が必要とされる。一般に乾燥地の開拓農地では除塩の技法が工夫されているが、ウズベクでは灰色土(シエローゼム)に対しても冠水による塩分の除去が行われているという。

(1976.11.20)